ロンサールにおける Myrte と楽園
―― 楽園描写と古典 ――

延味　能都*

序

プレイヤード派の詩人達が、ギリシア・ローマの古典作品を参考にし、模倣し、強い意志を持って新たな作品を生み出すべく、これらを自己の作品に取り込もうとしたことは周知のことである。彼らは古典古代の作品を下敷きにして、その上に独自の描写を構築しようとした。この状態は、異文化を拒絶せずにより多様な発想のために利用するという点で、いわば文化的な共生状態でもあったわけだが、このような状況では、書き手と読み手の間にある種の約束が成立することになる。たとえば月桂樹(月桂冠)＝栄誉・栄光という共通の理解があることにより、書き手は月桂樹、あるいは月桂冠という語を用いて「栄光」を表現することができるのだ。

ところで、月桂樹と共に、ロンサールの作品ではミルト myrte[1]という植物もまたある種の約束のもとで使用される場合が多い[2]。このミルトは古典古代ではヴィーナスの聖木・聖花として[3]、バラや鳩などと共に、ヴィーナスの属性である「恋愛」と強く結びついていた。ロンサールの作品においても、ミルトは恋愛と結びついている場合は多いが、ミルトはただ単に恋愛を示唆するだけではない。ミルトは時には恋愛詩という詩のジャンルを示す場合もあり、時には恋人達が愛を語らう森や木陰であり、時にはもはや恋とは離れた「楽園」という概念までも表す場合がある。多くの場合、ホメーロス、ウェルギリウス、ティブルス、オウィディウスといった古典古代の作家を下敷きにして、ロンサールは緻密に描写を組み上げており、隙のない場面描写に成功している。いわば古典を利用するための約束を守っているのである。

しかし、ミルトの出てくる描写をロンサール全集でひとつひとつ確認してゆくと[4]、時には整合

---

* 岡山大学文学部助教授

1 本稿で参照した訳本によっては異なる名称があてられている。金雀児(えにしだ)（『アエネーイス』、ウェルギリウス著、泉井久之助訳、岩波文庫、第3刷、1991）、天人花(ミルテ)（『ウェルギリウス　牧歌・農耕詩』、ウェルギリウス著、河津千代訳、未来社、初版、1981）、ミルテ(『祭暦』、オウィディウス著、高橋宏幸訳、叢書アレクサンドリア図書館第一巻、国文社、初版1994)、桃金嬢(てんにんか)（『変身物語』、オウィディウス著、中村善也訳、岩波文庫、1984）。以上のように訳語にはばらつきがあるのだが、対応するラテン語は myrtus である。現代語の仏和辞典での一般的な訳語は銀梅花（ぎんばいか）である。

2 現代フランス語で myrte と綴られるこの語は、ロンサールでは myrte, myrthe, 形容詞では myrté, myrteux, mirtin などの形で現れている。

3 Virgile, *Bucolica*, Ⅶ, 62 :«formosae myrtus Veneri», «*celui (l'arbre préferé) de la belle Vénus*».

4 Creore のインデックスを利用することによって、40例以上の例を見つけることができる。

性のとれない描写となっている例もあり、時には奇妙な要素が入り込んでいる描写もあることに気が付く。本稿ではミルトという植物がどのように使用されているかを検討することから始め、古典作品を利用した描写の一端を考察しようと思う。

1．ミルトが象徴するもの

まず、ミルトという植物は古典古代の作品とどのように関わっており、ロンサールの作品にどのような形で使用されているのだろう。*Les Amours* (1552) のソネ66番にはミルトと月桂樹の双方を含む次のような一節がある。

Quand l'archerot emplumé par le dos
D'un trait certain me playant jusqu'à l'os,
De sa grandeur le sainct prestre m'ordonne:
Armes adieu. Le Myrte Paphien
Ne cede point au Laurier Delphien,
Quand de sa main Amour mesme le donne.[5]

ミルトはもともとヴィーナスの聖木に数えられる木だが、ここではミルトに «Paphien» という形容が付加されている。ヴィーナスはパポス島に神殿を持っていたので、このミルトの木がヴィーナスに結びつけて使用されたことが明確に示されることになる。一方、月桂樹は、一般的な「栄光」を象徴するものでもあるが、狭い意味では「武勲による栄光」を示す。ここでは «Delphien» の形容が与えられることによって、この月桂樹はとりわけアポロンに結びついた武勲での栄光を示すことになる。アポロンはデルフォイに神殿を持ち、そこで戦勝などの予言を与えたからである。この解釈で読むと、この一節は、パポス島に神殿を持つヴィーナスに捧げられた聖木であるミルトは、デルポイに神殿を持つアポロンに捧げられた聖木の月桂樹に少しも劣るものではない、という展開になる。しかし、前後の文脈を考えると、それでは詩人の意図を十分にくみ取ったとするには不足である。ここは、恋愛での栄光は武勲での栄光に劣るものではない、つまり、恋愛詩を書くことも、英雄を題材にした詩を書くことに劣らぬ誉れある行為である、と読まねばなら

[5] 本稿での引用は全て *Œuvres Complètes de Ronsard*, éd. Laumonier, S. T. F. M., Librairie NIZET, 1937-1990。から行い、巻、頁、詩行を示す。ここはt. 4, p. 68, v. 9-v. 14.「背に羽を持つ射手が私を/過たぬ矢で骨まで貫くとき、/その聖なる司祭は命じるのだ。/武器をすてよ、と。パポスのミルトは/デルポイのロリエに些かも劣らぬのだ。/アモルが自らの手で与えるならば。」(延味訳)。

ないのである[6]。

もちろんミルトや月桂樹がいきなり詩のジャンルを象徴するわけではなく、古代ローマ作家の作品を調べると、オウィディウスの作品に、ミルトとヴィーナスを恋愛詩というジャンルへ結びつける一節がある。

Sex mihi surgat opus numeris, in quinque residat!
Ferrea cum uestris bella ualete modis!
Cingere litorea flauentia tempora myrto,
Musa, per undenos emodulanda pedes![7]

«ferrea bella» が戦いの詩を意味し、その背後にはもちろんアポロンがいる。そして今、戦いの詩に別れを告げて、ミルトでこめかみを飾れと詩神に呼びかけるとき、女神ヴィーナスとの関連により恋愛を意味するミルトは、ここでは恋愛詩という詩のジャンルを表すものとなっているのである。ここにミルトの木が恋愛詩というジャンルの象徴として読まれる仕組みがある。

上記の一節では、ミルトがヴィーナスの属性を介して「恋愛」を意味し、さらには詩神と結びついて「恋愛詩」を意味するというオウィディウスでの流れを利用し、恋愛詩を書くことは低俗なジャンルに手を染めることを決して意味しない、という独自のメッセージをロンサールは隙無く組み上げている。この一節では、そのメッセージ構築のために、古典での前例を利用するという一種の規則にロンサールは乗ったのであり、読者もそれを理解するに足る知識を共有しているのである。

では、同じように知識の共有によって利用可能な象徴、つまり古典作品を基盤にしてミルトが象徴するものとして、他にはどのようなものがあるのだろうか。まず、特にロンサールが好んでミルトと結びつけたのは死者が、とりわけ激しい恋の最中に死んだ者達が幸福に暮らす、いわゆる「恋人達の楽園」とでも呼ぶべき概念である。そして、この楽園はウェルギリウスやティブル

---

[6] T. 4, p. 68, note 3 :«C. -à-d. : le myrthe consacré à la déesse, de Paphos (Vénus) ne le cède pas au laurier consacré au dieu de Delphes (Apollon): et sans métaphore : il n'y a pas moins de gloire à écrire des vers amoureux que des vers héroïques.»

[7] Laumonier 版の注には参照先として示されてはいないが、ミルトとヴィーナスを恋愛詩というジャンルへ結びつけることになる典拠としてあげることができるだろう。Ovide, *Amores*, I, 1, 27-30. 仏語訳は«*Que mon oeuvre commence par des vers de six pieds et se pose sur des vers de cinq! Adieu, guerres cruelles, vous et le rythme qui vous est réservé! Muse des myrtes qui fleurissent sur les rivages, ceins tes tempes aux cheveux blonds, toi dont les chants exigent onze pieds.»『ローマ恋愛詩人集』、中山恒夫編訳、p. 442、注(1)「叙事詩（武器と激しい戦いの歌）は、長短短格の六脚の詩句を重ねて行くが、エレギーアでは上の句（奇数句）は六脚、下の句（偶数句）は五脚」、さらに *Amores*, III, 1、を参照すると、ここでの詩神 Musa がエレゲイアという名前を与えられ、恋愛詩を司る詩神であることが判る。

スの作品に出てくる死後の世界の記述を基盤にしている。

ウェルギリウスは『アエネーイス』で、アンキーセース（人間）とヴィーナス（女神）の子であるトロイアの英雄アエネーアース[8]が数々の苦難を乗り越えてローマを建国する話を語っているが、その中の物語の一つとして冥界行きがある。アエネーアースはクーマエの巫女を訪ね、予言を聞く。その後、亡き父アンキーセースに会うために冥界に降り、首尾良く父の影（亡霊）と会い、アエネーアースが建国することになるローマの国と、建国に伴う過程で登場する人物達とその運命に関する話を父から得ることになる。その父、アンキーセースが住んでいるのは少数の者だけが住むことを認められる「幸運の杜」である[9]。

アエネーアースは首尾良くこの「幸運の杜」に至るが[10]、ウェルギリウスが描いたその楽園は祝福をうけた人々の場所であり、野は厚いエーテル «aether» に包まれ、競技を楽しむ人もいれば、踊ったり、音楽に興じる人たちもいる。そこにはオルフェウスや、英雄達がおり、食事をし、月桂樹の森で勝利の歌を歌っている。そこにいる人々は祖国のために戦い負傷した者、工夫や発見で世の役に立った者、何らかの功績を挙げて名を残した人々であり、これらの人々は聖化された印に髪を白いリボンで巻いている[11]。ウェルギリウスの描く楽園とはこういう場所である。ところが、このウェルギリウスの「幸運の杜」の描写には月桂樹は出てくるが[12]、ミルトは出てこない。

一方、ティブルスはその詩集第1巻第3歌で、遠征の途中で病に倒れた詩人という設定で歌っているが、その中に楽園 «campi Elysii» の記述がある[13]。病に倒れた詩人をおいてメッセルラは出発して行こうとしている。ティブルスは自分が死んだ時の墓碑銘を示し、その後に、

sed me, quod facilis tenero sum semper Amori,
ipsa Venus campos ducet in Elysios.[14]

---

[8] アイネイアースまたはアイネアースとも表記される。本稿では泉井久之助訳『アエネーイス』の表記を採用した。

[9] Virgile, *Aeneis*, VI, 743-744 :«Exinde per amplum mittimur Elysium et pauci laeta arua tenemus», «*ensuite nous sommes envoyés dans les espaces de l'Élysée ; nous sommes quelques-uns à demeurer dans ces champs heureux* [...]».

[10] Virgile, Aeneis, VI, 638. «[...] devenere locos laetos et amoena virecta / fortunatorum nemorum sedesque beatas.», «[...] *ils parvinrent enfin aux espaces riants, aux aimables prairies des bois fortunés, les demeures bienheureuses.*»

[11] 「幸運の杜」の描写については Virgile, *Aeneis*, VI, 639-666を参照。

[12] Virgile, *Aeneis*, VI, 658 :«inter odoratum lauri nemus», «*dans un bois odorant de laurier*».

[13] 『ローマ恋愛詩人集』、中山恒夫編訳、アウロラ叢書、国文社、1985、「ティブルルス詩集」、第1巻第3歌「遠征途上病に倒れ」。メッサルラとは Marcus Valerius Messala Corvinus のことで雄弁家にしてローマの将軍であった。ティブルやオウィディウスの属する詩人グループの保護者でもあった。ティブルスの病に関しては同書、p. 61、注(1)：「メッサルラが当方に遠征したときに、ティブルルスも随行したが、途中病に倒れて、コルキューラ島に残った、という設定。この遠征の記録は他に皆無で、真相は分からない」。

[14] Tibulle, *Elegiae*, I, 3, 57-58. «*Mais moi, qui suis toujours docile au tendre Amour, Vénus elle-même me conduira aux Champs Elyséens.*»

と続けるのである。ヴィーナス自らがティブルスを連れて行くというこの «campi Elysii» とは、踊りと歌で活気に溢れ、鳥たちがいたるところで歌い、野原にはバラが咲き乱れ、若者達が乙女達と戯れ、絶えずアモルが戦をする楽園である[15]。楽園の全体的な描写自体はウェルギリウスの楽園と大きな違いは無い。しかし、次の一点でティブルスの楽園はウェルギリウスの描く楽園と異なっている。

illic est. cuicumque rapax Mors venit amanti.
et gerit insigni myrtea serta coma.[16]

つまり、この「楽園」にはミルトが出てくるのだ。ここには恋の最中に死に見舞われた者たちがおり、その違いは髪につけたミルトの飾りで見分けが付くのだ。恋の最中に死んだ者の印としてミルトが使われているのは、もちろん、ミルトを聖木・聖花とするヴィーナスとの関係が下敷きとなっている。この点に留意してティブルスの描写を読み直すと、ヴィーナスや恋を示すものが他にもあることに気づく。野を埋めるバラはヴィーナスの属性であり、アモルはヴィーナスの息子なのであり[17]、もちろん恋の神なのであり、その神が絶えず戦を仕掛ける場所とは、死した恋人たちが幸福に暮らす楽園に他ならない。したがってミルトはティブルスの描く楽園である «campi Elysii»、死後の（とりわけ恋人たちの）幸福な世界を象徴するものとして利用可能なのである。ところが、ここに一つやはり問題がある。ロンサールはその作品で「ミルトの木陰（森）」という表現を好んで用いている。そしてティブルスの描写には髪飾りとしてのミルトへの言及はある。しかし、ここにはロンサールが好んで用いた「ミルトの木陰（森）」といった描写は存在していないのである。

では、「ミルトの木陰（森）」というロンサールの表現と、ウェルギリウスとティブルスの描写がどのように結びついて、恋人達が幸福に暮らす楽園となるのだろうか。先に示したウェルギリウスの楽園は「喜びの場所」«loci laeti»、「幸福の杜の心地よき野」«amoena virecta forutunatorum nemorum»、「幸せなる住処」«sedes beatae» ではあるのだが、そこの描写にはミルトは関係して

---

[15] Tibulle, *Elegiae*, I, 3, 59-64.«hic choreae cantusque vigent, passimque vagantes / dulce sonant tenui gutture carmen aves ; / fert casiam non culta seges, totosque per agros / floret odoratis terra benigna rosis ; / ac juvenunum series teneris immixta puellis / ludit, et adsidue proelia miscet Amor.»«*Là règnent les danses et les chants, et, voltigeant de tous côtés, des oiseaux font résonner les doux accents de leur gosier délicat ; le cinnamome y pousse sans culture, et dans toute la campagne la terre complaisante est fleurie de roses ambaumées ;et de longues files de jeunes gens mêlés aux délicates jeunes filles se jouent, et Amour renouvelle sans cesse leur escarmouches.*»

[16] Tibulle, *Elegiae*, I, 3, 65-66. «*Là se trouvent tous les amants qu'a surpris la Mort avide, et des couronnes de myrte ornent leur chevelure*».

[17] 神話ではアモルはエロス、クピドなどと同一視される。

いない。ティブルスでは概念としては、死後の恋人たちが幸福に暮らす場所、というロンサールが好んで描く世界に通じるものがあるが、そこにはロンサールがキーワードのように使用する「ミルトの木陰（森）」に相当するような描写は存在していない。ところが、この二つを結びつける描写がやはりウェルギリウスにある。

ティブルスに出てきたような、恋に死んだ者達の亡霊が出てくる場面がウェルギリウスにも別にあるのだ。死んだ恋人たちは「ミルトの森」«myrtea silva» に住んでいるのである。しかし、このウェルギリウスの「ミルトの森」はティブルスの楽園とはかなり性質が異なる。

Nec procul hinc partem fusi monstrantur in omnem
lugentes campi ; sic illos nomine dicunt.
Hic quos durus amor crudeli tabe peredit
secreti celant calles et myrtea circum
silua tegit ; curae non ipsa in morte relinquont.[18]

ミルトと恋人たちが関連づけられるという意味づけは同じなのだが、この場所は「悲嘆の野」«lugentes campi» と呼ばれ、ここでは、死後の恋人たちは決して幸福ではない。生前の恋の苦しみをそのまま引きずっているのである。

アエネーアースは父のアンキーセースの住む「幸運の杜」へと至る途中でこの場所を通過しているので、この場所は「幸運の杜」とは明らかに別の場所である。だが、ロンサールは、ティブルスの楽園とウェルギリウスの「幸運の杜」から得られる楽園的要素に注目している。そして、さらに「悲嘆の野」から不幸や悲劇という側面は抜け落ち、「ミルトの木陰（森）」と恋人達との関係だけが抽出され、楽園に結びつけて使用されている。このようにしてロンサールは古典作品の描写を基盤にして彼の描写を組み上げているのだ。

2．「楽園」の象徴としてのミルト

ロンサールの作品ではミルトは楽園を示す一つのキーワードとなっているが、楽園の描写には複数の古典古代作家の楽園が取り込まれている。そして、そこではウェルギリウスの「幸運の杜」とティブルスの楽園、ウェルギリウスの「悲嘆の野」、さらにはオウィディウスの「黄金の時代」にも通じる楽園が、多くの場合、必ずしも明確に区別されてはおらず、うまく融合するように組み

[18] Virgile, *Aeneis*, VI, 440-444. «*Non loin se découvrent, en tous sens étendus, les Champs des Pleurs ; ainsi les nomme-t-on. Là ceux que le dur amour a consumés en cruelles langueurs trouvent asile sur des sentiers secrets ; des buissons de myrte tout autour les protègent ; leur peine, aux bras mêmes de la mort, ne les quitte.*»

上げられている。基本的なものだけで、これらの4つの要素が入り交じって各楽園の描写が成立しているのだが、読み手は古典古代の作品を手がかりにそれらを読み解いて行かなくてはならない。

Élégie sur le trépas では、若くして他界した司祭のアントワーヌ・シャテニェ Antoine Chateignier を歌っている[19]。シャテニェの魂はもちろん楽園 «Champs Élysées» へ行き、同じように若くして他界したコクレ学寮での同僚クロード・ド・リニェリ Claude de Ligneri[20]と出会う。ロンサールはシャテニェの魂に向かって、リニェリと共に自分のことを語ってくれるように頼むのである[21]。もちろん二人が行った場所が «Champs Élysées» であるという設定が行われているため、二人の魂に死後の苦しみは無いし、さらに二人は恋人同士などでは無いのだから、«les bois myrtés» は楽園を示す約束の言葉として現れている。

De l'élection de son sépulcre では、ロンサールは故郷の Vendômois にある小さな島を歌っている。自分の墓を建てるならこの場所にしたい、とその小さな島を選んだ歌であり、その島を讃えようとする以上、当然、その場所は楽園を思わせるような場所として設定され、描写もそれにふさわしいものでなければならない。

La gresle, ne la nége,
N'ont tels lieus pour leur siege,
Ne la foudre onque là
  Ne devala.
Mais bien constante i dure
L'immortelle verdure.
Et constant en tout tens
  Le beau printens.
Et Zephire i alaine
Les mirtes, & la plaine
Qui porte les couleurs
  De mile fleurs.[22]

---

[19] T. 2, p. 62, note 1.

[20] T. 3, p. 170, note 2.

[21] T. 5, p. 250, v. 149-v. 152 : «Parle toujours de moi, de moi par les rivages, / Par les desers des roches plus sauvages / Entre les bois myrtés, ou dans un antre coi / Soir & matin parle toujours de moi.». Champs Elysées で知り合い同士が語り合うという発想はオウィディウスに由来するとされる。T. 5, p. 250, note 2 «[...] Ce passage s'inspire encore d'Ovide, *Amores*, III, IX, 59 et suiv.»

[22] T. 2, p. 102、v89-v100.

Laumonier 版ではホメーロスの極楽（エーリュシオン）の描写、ウェルギリウスの楽園の描写、ティブルスの楽園の描写の三カ所が指摘されている部分だが[23]、この３人の描写はもちろん同じものではない。参照の痕跡をもっとも残しているのは最初のストロフで、ここは明らかにホメーロスの痕跡を残している[24]。ホメーロスの該当箇所にはミルトの語は無いのだが、それを補ってあまりあるほど、最初のストロフの描写はホメーロスに近い。また三つ目のストロフの西風«Zéphire»の記述もホメーロスに出てくる[25]。しかし、ホメーロスの西風はやや烈しく、ここに出てくるロンサールの西風とはやや性格が異なる。

他の部分ではウェルギリウスやティブルスの痕跡は実はあまりはっきりしたものではない。しかし、ミルトの語によって、ティブルスの描く楽園の示唆が可能になる。様々な色の花々で埋められた野はティブルスの描く「バラの咲き誇る大地」の痕跡を示しているように受け止めることができる[26]。また、ミルトに注目すると、Laumonier 版では言及していないが、この当時によく参照されたオウィディウスにも結びついてゆく[27]。オウィディウスには二人の恋人たちプロクリスとケパレーについて語る部分があるが、その中に出てくる泉の周辺の描写がここに非常に近い。もちろんこの場所は穏やかで幸福な場所として描かれている。この場所には西風も登場しており、この西風の描写に関してはホメーロスよりもむしろオウィディウスの描写の方がロンサールに近い。ホメーロスの西風は烈しいものだが、この場面のオウィディウスの西風は優しいのである。また、西風についてはオウィディウスの『変身物語』での「黄金の時代」の描写にも現れている。西風も、楽園を描写するために欠かせない要素なのである。さらに「永遠に続く春」も明らかにオウィディウスの『変身物語』での黄金の時代の描写からきている[28]。

---

[23] T. 2, p. 102, note 1 : «Pour ces trois strophes, cf. Homère, *Od.* Ⅳ, 563 et suiv. ; Virgile, *En.* Ⅵ, 638 et suiv. ; Tibulle, Ⅰ, Ⅲ, 57 et suiv.»

[24] 「雪も無く、冬の暴風雨（あらし）も烈しからず、大雨とてもかつて降らぬ、」、『オデュセイアー』、呉茂一訳、岩波文庫、1979、Ⅵ, 567.

[25] 「年がら年じゅう大洋河（オーケアノス）が、音高く吹く西風（ゼピュロス）のつよい息吹を送りこして…」、『オデュセイアー』、呉茂一訳、岩波文庫、1979、Ⅵ, 568-569.

[26] Tibulle, *Elegiae*, Ⅰ, 3, 61-62, «totosque per agros / floret odoratis terra benigna rosis».

[27] Ovide, *Ars amatoria*, Ⅲ, 687-694 :«Est prope purpureos colis florentis Hymetti / Fons sacer et viridi caespite mollis humus ; / Silva nemus non alta facit ; tegit arbutus herbam ; / Ros maris et lauri nigraque myrtus olent ; / Nec densum foliis buxum fragilesque myricae / Nec tenues cytisi cultaque pinus abest ; / Lenibus inpulsae Zephyris auraque salubri / Tot generum frondes herbaque summa tremit.». «*Près des coteaux riants de l'Hymette émaillé de fleurs, est une fontaine sacrée ; un mol gazon vert couvre le sol. Des arbres peu élevés y forment un bocage ; l'arbousier y abrite l'herbe ; le romarin, le laurier, le myrte sombre parfument l'air ; on y trouve aussi en abondance le buis au feuillage touffu, le frêle tamaris,l'humble cytise et le pin domestique. Aux douces haleine des zéphyrs et d'une brise salutaire, tous ces feuillages et le sommet des herbes frémissent légèrement.*».

[28] Ovide, *Metamorphoseon*, Ⅰ, 107 : «Ver erat aeternum».

一方、ウェルギリウスに関しては、描写という観点からは非常に関係が薄い。ほとんど重なる描写は無く、Laumonier 版の注釈の示す部分にはミルトの語も出てこない。ここでミルトの語に注目すると、ウェルギリウスの記述としては「悲嘆の野」へとつながってしまうのである[29]。しかしここではミルトの語の存在はむしろウェルギリウスの「幸運の杜」（＝楽園）とティブルスの楽園を意識させることになる。ロンサールの提示するミルトの森にはもはや「悲嘆」の属性は無く、故郷の小さな島の描写は楽園の描写という、人間界を離れた理想郷の描写という世界に入り込んでいる。この部分の描写は平和で恵まれた心地よい土地の描写ではあるが、それだけでは小さな島の描写は現実世界から離れることはできず、「楽園」という高みにまでは至らない。ミルトはその描写を楽園へと破綻無く結びつける重要な要素となっているのである。こうしてロンサールは複数の作家の描写を基盤にして、それでも、統一のとれた破綻のない楽園世界の描写を組み上げている。そしてここはもちろん、Vendômois＝至上の楽園という図式で読むのが約束なのである。

Épitafe de Michel Marulle では、ロンサールは、「マリュルはあの世でティブルスと一緒に暮らしている」という。

Il vit là bas avec Tibulle.
Dessus les rives Elysées,
Et sous l'ombre des myrtes vers,
Au bruit des eaus chante ses vers
Entre les ames bien prisées.[30]

ここではマリュルはティブルスと暮らしているのだから、その「あの世」は当然ティブルスの描く楽園であることが約束になる。さらに2行目に «Elysées» の語が出ているのでティブルによって描かれた楽園であることは一層確かなものとなる。ところが次に続く3行はティブルスの楽園には無い描写なのである。これによく似た描写が現れるのはウェルギリウスの「幸運の杜」の描写の場面だ。

---

[29] ウェルギリウスに出てくる「幸運の杜」«campi Elysii»と「悲嘆の野」«lugentes campi» に関しては、ロンサールと Laumonier 版の双方で混同もしくは同一視をしている様子がある。Laumonier 版では t. 12, p. 221, note 5 および t. 14, p. 118, note 4 で、それまでの混同を修正するような注釈が入っているが、他の注釈でうまく説明できていないものがいくつかある。この点についてはまた稿を改めて論じる予定である。

[30] T. 6, p. 28, v. 12-v. 16. «sous l'ombre des myrtes vers» に対して Laumonier 版では «Dans le bois réservé aux poètes de l'amour.» の注が付いているがこれは少しおかしい。特に «des myrtes vers» に関しては他の出典が想定できるが本稿では触れない。

Conspicit ecce alios dextra laeuaque per herbam
uescentis laetumque choro paeana canentis
inter odoratum lauri nemus, [...] [31]

ところが、こんどはそこにはミルトの語は無いのである。ミルトの語が在ってほしい場所にはウェルギリウスでは月桂樹 «laurier» の語が入っている。しかしこの月桂樹からミルトへの置き換えは以下のように読まれねばならない。マリュルはネオラテン詩人であり、その作品の中には恋人 Néère を歌った *Epigrammata* がある。この詩でも後の方で *Epigrammata* を示唆する一節があるが、ロンサールはこのマリュルの *Epigrammata* から強く影響を受けている[32]。したがってここは、むしろ武勲での栄光を表すこともある月桂樹よりも、恋愛詩を象徴するミルトでなくてはならないのである。このように «laurier» を «myrte» に置き換えることによって、現実から離れた「楽園」は構築され、ティブルスの楽園、ウェルギリウスの「幸運の杜」、しかも恋愛詩を書いた詩人にふさわしくミルトのある「幸運の杜」でマリュルは幸せに暮らしている、という図式が破綻無く完成している。

さらに *Discours amoureux de Genevre* では以下のように恋人の魂の憩う場所の描写が始まる。

Or à dieu, je m'en vois aux rives amoureuses,
Compaigon du tropeau des ames bien heureuses,
Dessoubs la grand forest des myrthes ombrageux,
Que l'orage cruel ny les vents outrageux
N'efeuillerent jamais, mais où toujours soupire
Par les vermeilles fleurs le gracieux Zephyre.[33]

ここには、すでにこれまで見てきて馴染みになった、楽園を示す必須要素がある。恋に死すという点と木陰を与えるミルトの大きな森はウェルギリウスの「悲嘆の野」を示しているようだが、嵐から守られているのはホメーロスのエリューシオン（極楽）の描写からきており、さらに心地よい西風はオウィディウスに由来している。ここでは各種の属性が融合して、結果としてティブルスの楽園の性格にも似た楽園であることが容易に分かる。

---

[31] Virgile, *Aeneis*, VI, 656-658 :« *Voici qu'il en aperçoit d'autres, à droite, à gauche, sur l'herbe, prenant leur repas, chantant en chœur un joyeux péan, dans un bois odorant de laurier,* [...]».

[32] «[...] Marulle, dont il a traduit ou paraphrasé ici (*Continuation des Amours*) plus de vingt *epigrammata*.», Paul Laumonier, *Ronsard poète lyrique*, p. 168, Slatkine Reprints, 1972, éd. princeps Hachette, 1932.

[33] T. 12, p. 269, v. 287-v. 292. Laumonier 版ではここに後述の *Élégie* での楽園の描写への送りが付いている。note 1. «V. ci-dessus l'élégie *De vous & de fortune*, vers 130 et suiv.»

以上のように、古典古代、言い換えれば異文化の要素を多分に持ち合わせる楽園の描写は、それでも、ロンサールの作品の中でうまく組み上げられて統一のとれた世界を構築している。ミルトの語は極楽、楽園、幸福な世界を示す約束の語となっているのであり、読み手は同じように古典古代の作家達をたどることにより、作者が表現しようとしたものを読み取ることができ、読み取らねばならないのである。しかし、時には様々な要素の組み合わせにずれが生じる時もある。

3．不　整　合

ロンサールのあまりにも有名なソネの一つに *Quand vous serez bien vieille.* がある。年老いた女性がかつて美しかった時の恋を懐かしみ、恋人につれなくしたことを悔やむ話である。そしてここにもミルトが現れているのだが、これまでに見てきたことを考えると、以下の一節には曖昧な部分が残るように思えるのである。

Je seray sous la terre, & fantaume sans os
Par les ombres Myrtheux je prendray mon repos.
Vous serez au fouyer une vieille accroupie,
Regrettant mon amour, & vostre fier desdain.[34]

Laumonier 版の注釈では、ここには «Sous les ombrages de la forêt de myrtes, où se tenaient les grands amoureux aux Champs Élysées.» となっている[35]。この考え方で行けば、昔の恋の自分がした仕打ちを嘆き悔やむのは年老いた女性の方であり、ロンサールはあの世で幸せに暮らしているという話であり、事実そのようによめない話でもない。ところが、奇妙なことにエレジー *De vous & de fortune* ではウェルギリウスの «lugentes campi» の例としてこのソネへ送りがついている[36]。「ミルトの森」や「ミルトの木陰」だけがキーワードになっているときは、そのままでは「悲嘆の野」に至ってしまうのだが、ロンサールでは、「悲嘆の野」の「悲嘆」のイメージが前面に現れないように、ウェルギリウスの「幸運の杜」やティブルスの «campii elysii» に見られるような楽園的要素が添えられる場合がある。しかしここでは楽園的な解釈を可能にする描写が欠落している[37]。そのため、ここの «les ombres Myrtheux» は、このまま読めば、もちろんウェルギリウスの「悲嘆の野」«lugentes campi» として読まれなければならない。なぜならミルト

[34] T. 17, p. 266, v. 9-v. 12. le sonnet *Quand vous serez bien vieille.*
[35] T. 17, p. 266, note 2.
[36] 前述の Laumonier 版の注釈 t. 12, p. 221, note 4.
[37] «en repos»の存在だけではこの悲観的な読みの可能性は覆らないと思う。

の木陰が現れるのは「悲嘆の野」においてだからである。この読み方で行くと、ロンサールはあの世に行っても「悲嘆の野」におり、いまだに冷たい仕打ちを嘆いているという話になるのだが、それは最後の行の内容と妙に一致する。これまで見てきたことから考えると、この注釈ではウェルギリウスの「幸運の杜」«campii elysii» と「悲嘆の野」«lugentes campi» が一緒になっていることがわかる。そしてそのような場所は存在しないことも分かるのである。二つの注釈からは、果たしてロンサールは楽園へ行ったのか、「悲嘆の野」にとどまってしまったのか、このままでははっきりしないのである。

他には、身分違いの恋をして、自分の身分が下であるが故に、つれない仕打ちに苦しむ男が歌う詩という設定になっている *Élégie* がある[38]。あまりにつれない恋人の仕打ちに、男はやがて死後の世界に救いを求めようと考えるに至る。そして、いずれは二人に平等に訪れる死の後にはあの世で会うことまで拒絶しないでくれ、と懇願するのだ。そしてその二人が再会する場所は以下のような場所なのである。

Et qu'apres nostre mort equalement tous deux
Puissions estre là bas par les champs amoureux.
Afin de vous conter, assis soubs les ombrages
Des myrthes Paphiens, ou de sur les rivages
Qui sont tousjours souflés d'un Zephyre tresdoux.
Les douleurs qu'en vivant j'aurai receu pour vous.[39]

最初の 2 行は「死んでしまえば身分の差も無くなり、あの世にある恋人達のための場所で一緒に暮らそう」という話である[40]。«les champs amoureux» がどこか、が問題になるが、次の行では «les ombrages des myrtes Paphiens» が現れており、問題の場所はかなり限定されてくる[41]。西風が吹くのは、ホメーロスにも出てきたが、ここではむしろオウィディウスである[42]。この西風の描写によって、ある意味ではティブルス的な楽園の雰囲気が付け加えられており、ここですで

[38] T. 12, p. 216, l'élégie *De vous, & de fortune*, v. 23-v. 24. «Ainsi, pour estre moindre & vous superieure / De race & de grandeur, je languis à toute heure».

[39] T. 12, p. 221, v. 129-v. 134.

[40] T. 12, p. 221, note 3. «C. -a-d. : devenus socialement égaux par la mort, nous puission vivre ensemble aux Enfers dans la region réservée aux amoureux.»

[41] T. 12, p. 221, note 4. «[...] Il s'agit de la forêt de myrtes, où Virgile a rangé les victimes de l'amour-passion (*En.* VI, 442 sqq).[...]»

[42] Ovide, *Ars amatoria*, III, 693-694. «Lenibus inpulsae Zephyris auraque salubri / Tot generum frondes herbaque summa tremit.». «*Aux douces haleine des zéphyrs et d'une brise salutaire, tous ces feuillages et le sommet des herbes frémissent légèrement.*». Cf. Homère, *Odyssée.*, VI, 568-569.

に恋人達が死後に幸福に暮らす楽園に思い至るのが、これまで見てきた読みの約束である。だが、そうすると最後の行と平仄が合わないのである。ここは引用部の最後の行に示されているように、男が女に死後も依然として生前の恋の苦しみを嘆く場所なのである。すると、この場所は、ウェルギリウスの描いた「悲嘆の野」であると読まなければならない。さらにこの後に、

Là, sans peur ny danger, sans soupson, ny sans creinte,
Sans respect de grandeur, je vous feray ma pleinte.
Et vous ramentevray[43] mes premieres amours
Qui vives au tombeau se garderont toujours :
Car la mort, tant soit-elle aux amoureux contraire,
De vostre beau lien ne me pourra deffaire.[44]

とあることによって、ここが単なる楽園ではないことがわかる。生前の恋の苦しみを死んでもなお引きずっており、それを嘆く場所といえば、この場所はやはり「悲嘆の野」として読まねばならない。

ところがこの直後から場面描写は一転し、同じ場所でありながら、いかにも楽園という描写の中で幸福な二人が暮らしている様子が描かれる[45]。そしてこの詩は

Lors les esprits diront en nous voyant tous deux :
Ceux cy en leur vivant ne furent point heureux
Pour n'estre pas egaux : mais la mort qui egalle
Les sceptres aux leviers, comme tresliberalle.
(Apres avoir souffert sur la terre long temps)
Les a fait icy bas bien heureux & contens.[46]

となって終わる。このため、ロンサール風の「死後に恋人たちが幸福に暮らす楽園」という図式はここでは各要素の融合がうまくいっておらず、ほころびが見える。同じ場所でありながら、始めはウェルギリウスの「悲嘆の野」そのもので始まり、最後は「幸運の杜」、あるいはティブルス的な楽園となって終わるというつぎはぎの痕跡がはっきりと出た世界となってしまっているので

[43] Le verbe *ramentevoir* mis au futur ; rappeler, remettre en mémoire (Huguet).
[44] T. 12, p. 222, v. 135-v. 140.
[45] この詩編の140行目までの描写と141行目からの描写は別の場所のようである。
[46] T. 12, p. 222, v. 157-v. 162.

ある[47]。楽園の象徴としてのミルトの語があるにもかかわらず、ここには同じように「嘆き」の要素があり、ここでのミルトの語の使用はむしろ「嘆きの野」へと読者を誘ってしまうのである。

4．nous の侵入

Prosopopée du Beaumont levrier du Roy & Charon は王の猟犬であった Beaumont を歌った詩である。この詩の中で Beaumont は冥界の番犬ケルベロスに出会った後、道が二つに分かれた場所に至る。この場所の描写はウェルギリウスにもある描写で、一方はエリューシウム(楽園)に通じ、片方は地獄へ通じている[48]。この場面のロンサールの描写は平明で、言い換えれば特徴の無いものである[49]。だが、その行く先選択の場所から Beaumont は «Suivant le train d'une si belle voye / Ce franc levrier aux Myrthe se convoye»[50]と楽園へ続く正しい道を選んだことがミルトの語によって示されるのである。

Beaumont はさらに奥に進んだ場所で、やはり王の愛犬であった Courte[51]に出会う。

Courte à Beaumont fit l'humble reverence,
Luy demanda des nouvelles de France,
Puys sont entrez dessoubz les bois myrthés,
Des purs espritz par tropes habités,
Qui comme oyseaux aux aesles emplumées
De bois en bois vollent par les ramées.
Francz des soucis, & des maux qui nous font
Porter icy des rides sur le front.[52]

---

[47] Laumonier 版はこの部分に注を与えている。T. 12, p. 221, note 5. «Virgile [...] et Petrarque (*Trionfo d'Am.*, I, 150) ont mis cette forêt de myrtes dans les Champs des pleurs (*lugentes campi*) ; mais Ronsard, suivant Tibulle, I, 3、57 sqq. et J. Second, *Bas.* II, l'a placée dans les Champs élyséens, où règne un printemps éternel et ou résident les bienheureux.» この注では、ウェルギリウスやペトラルカはこのミルトの杜を「悲嘆の野」lugentes campi においたが、ロンサールはティブルスやジャン・スゴン Jean Second に倣って、永遠の春が続き、幸せな人々が暮らす「幸運の杜」Champs Elysees 置いたということになっている。ただ、この考え方だけでは不足があるように思う。この問題に関しては稿を改めて論じる予定である。

[48] アエネーアースを案内する巫女の言葉である。この場所は「悲嘆の野」と「幸福の杜」の間にある。Virgile, *Aeneis*, VI, 540-543 : «Hic locus est, partis ubi se uia findit in ambas : /dextera quae Ditis magni sub moenia tendit, / hac iter Elysium nobis ; at laeua malorum/ exercet poenas et ad impia Tartara mittit.»

[49] T. 14, p. 117, v. 88-v. 90 : «L'une conduit au juge Rhadamante, / Et l'autre meine aux champs delicieux, / Heureux sejour des Espritz precieux.»

[50] se convoyer à, se diriger vers の意。

[51] T. 14, p. 110, *Épitaphe de Courte chienne du Roy*.

[52] T. 14, p. 118, v. 107-v. 114。この部分に付けられた注釈はやはりここがティブルス的な楽園を示しているとする解釈である。«Ici, comme ailleurs, R. s'écarte de la tradition virgilienne pour suivre celle des élégiaques

二匹はミルトの森に入ってゆくのだが、その森は前世の苦悩から解き放たれた幸せな人々が住まう場所である。たしかに Beaumont は雄で Courte は雌だが、このミルトの杜で二匹は生前の愛を語るわけではなく、Courte は単にフランスの最近の出来事を訊ねたにすぎない。さらにウェルギリウスの冥界の地理上では、分かれ道は「悲嘆の野」よりも奥にあるため、すでに「悲嘆の野」は過ぎており、場所としては「幸運の杜」でなければならない。ウェルギリウスの本来の描写には無いミルトは、「悲嘆の野」を表す象徴ではなく、もはや「幸運の杜」を示すものでもなく、直接に「楽園」を示すキーワードになっている。したがって、「楽園」の構築という点ではうまく行っているのだが、ここには興味深い一節がある。«des soucis, & des maux qui nous font / Porter icy des rides sur le front» がそれである。ここでの代名詞 «nous» は誰を指しているのだろうか。実は他にも同様な例があるのだ。

Hymne de l'Autonne「秋の讃歌」は詩の虚構性を示した一節で有名だが、内容的には「ローベピヌ殿へ」との献辞によって示されるように、Claude de Laubespine, baron de Châteauneuf-sur-Cher へ捧げられた、擬人化した「秋」を歌った詩編である[53]。作品は470行からなり、1行～86行までは前書きにあたり、そこではロンサールの誕生から、若いうちから詩に興味を持ち、ドラのもとで詩を学んだことまでが神話的要素も加えて語られている。本編にあたる「秋」の物語は87行目から始まる。

「秋」は恋をしてもよい年頃に成長しているが、まだ恋のことなど気にかけず無邪気なままである。ある日、乳母は、「秋」が人間の子ではなく、ある配慮から乳母の「洞窟」に連れてこられたことを「秋」に告げ、彼女（「秋」）が両親に会いに行べき時であり、さらには夫を探しに行くべき時がきたことを告げる。彼女は両親に会う助けを得るために「風」に会いに行き、「風」に太陽の宮殿まで運んでもらう。彼女の父は「太陽」なのである。しかし「太陽」は彼女に会うことを望まない。その後、彼女は天の怪物に追いかけられた後で、兄弟の「春」の宮殿を訪れる。「春」は「西風」に会いに行っていて不在である。次に「秋」は「夏」の宮殿を訪れ、さらに彼女は母である「自然」の宮殿を訪れる。ところが「自然」は「秋」を追い出し、「秋」はそこを涙ぐみながら立ち去る。そして谷間の奥でバッコスに出会い、バッコスは「秋」と恋に落ちる。「秋」も彼がバッコスであることを知り、その妻となる。

最後にはもちろん献呈先であるオーベピヌ殿の繁栄への祈願があるのだが、以上が「秋の讃歌」の概略である。この物語は「秋」が擬人化されていることにより、そもそもはじめから虚構世界

---

latins. Dans Virgile, la forêt de myrtes abrite les grands amoureux, que les soucis de leur vie poursuivent même après la mort ; c'est la région des *lugentes campi* (*En.* VI, 440 sqq..). Ici, au contraire, nous sommes aux champs élyséens (*Ibid.*, 638 sqq.)».

[53] T. 12, *Hymne de l'Autonne à Monsieur de Laubespine*, p. 46-67。日本では『ロンサール詩集』、高田勇訳、青土社、1985に収録されている。

なのだが、「秋」が訪れる兄弟の「春」の宮殿は天上の宮殿であり、もう一段別の虚構世界に入ることになる。そして「春」の宮殿の描写はまさしく今までみてきたような定式化された楽園の描写なのである。

Ce palais est assis au beau milieu d'un pré,
De roses & de lis & d'oeillets diapré,
Qui ne craignent jamais l'horreur de la froidure.
Non plus que les Lauriers chevelus de verdure.
Les pins & les cypres y voisinent les cieux,
Et le cedre embasmé d'un flair delicieux
Les rossignols logés dans les boys y jargonnent.
Par les jardins carrés les fonteines resonnent,
Qui arrousent le pied des pommeux orangers,
Et des myrthes sacrés, qui nous sont estrangers.[54]

色とりどりの花々の咲き乱れる野にあり、鳥は歌い、泉から流れ出す水は大きなオレンジの木を潤し、そしてここにもやはりミルトの木がある。この描写はホメーロス、ウェルギリウス、ティブルス、オウィディウスの描く楽園の描写の混合であり、一人の作家に帰するものでは無い。だが、やはり、どの作家にも由来しない奇妙な半句がここにはある。«qui nous sont estrangers» の半句がそれであり、このような半句は古典古代の作家の楽園の描写には現れてこない。Laumonier 版ではこれがフォレンゴ Teofilo Folengo の作品に由来するものであることを指摘している[55]。フォレンゴの作品は一種荒唐無稽な物語であり、ラブレーの原型ともされるものであるが、そのフランス語翻訳版がある。この版を調べてみると、ほぼ同じような描写が確かにある[56]。ところが、«qui nous sont estrangers» に相当する部分はフォレンゴにも無い。

---

[54] T. 12, p. 59, v. 267-276.

[55] T. 12, p. 58, note 5 : «La description qui suit s'inspire de Folengo, [...]». Laumonier 版の注釈では該当部分のページ数の指摘までは行われていない。

[56] Teofilo Folengo, *Histoire maccaronique de Merlin Coccae, prototype de Rabelais*, Liv. XI, p. 241. «Là se voyent les plaisans feüillages des myrthes, qui avec leur ombrage entretiennment en frescheur les fleurs et la verdure des herbes, et donne un grand contentement à la lassitude de ces Nymphes. Il y a aussi grand' abondance de Fouteaux, de Pins, de Cedres, de Citronniers, de Neflliers, estendans leurs ombres pour servir de pausade aux Nymphes. Elles vont quelques fois à la chasse, portans arcs et flesches, et renversans souvent des daims, cerfs, chevreulx. Il n'y a point faute de bois et beaux buissons pour la chasse, qui sont de Cedres et d'Orengiers, de Myrthes, de Lauriers, de Lentisques et de Genievres.». Éd. G. Brunet et P. L. Jacob, Adolphe Delahays Libraire-Éditeur, Paris 1859, reproduction num. BNF, 1995.

特に代名詞 «nous» が誰を指し示しているのかを考えると、この半句は実は重要な意味を持っている。この半句の存在で、この虚構の天上世界の描写がある意味では全く新たな展開を獲得していることになるからだ。先の例も含めて、代名詞 «nous» に該当する可能性があるのは、ここでは作者やローベピヌ殿を含む、16世紀の読者一般でなければならないからである。この代名詞 «nous» の存在によって、古典を下敷きにした楽園世界にいきなり読者のいる現実からの視点が持ち込まれるのである。

ま と め

ロンサールは古典古代の楽園の描写を巧みに利用し、自らの楽園描写にそれらを取り込んできた。このような場合、書き手、読み手の双方が古典の知識という基盤を共有することによって古典古代の作品の利用が可能になっている。本稿では古典とロンサールの作品でのミルトの語の現れ方を検討した。

古典古代の作品ではミルトはヴィーナスの聖木であったことから、恋愛、恋愛詩というジャンルを示すものとして使用される一方、オウィディウス、ティブルスなどでは楽園や楽園のような世界の描写にも現れている。しかしウェルギリウスでは、恋人達が死後に生前の恋の苦しみを引きずったままで留まる「嘆きの野」の象徴となっている。

ロンサールではミルトの語をキーワードとして、ウェルギリウスにおける「幸運の杜」«fortunata nemora» と「悲嘆の野」«lugentes campi»、ティブルスの «campi Elysii» の融合があり、さらにはホメーロスやオウィディウスの楽園描写の導入により、ミルトはとりわけ楽園を示す性格が強く出るものとなっている。

ロンサールの作品では、これらの複数の作家の描写を巧みに組み合わせているが、楽園の描写に不一致や破綻が認められる場合が少数ながらもあり、本稿では2つの例を示した。まず、有名なソネ *Quand vous serez bien vieille.* においては解釈に曖昧な部分が残ることを指摘し、別のエレジー *De vous, & de fortune.* では「幸運の杜」と「悲嘆の野」の描写がうまくつながっていない例を示した。最後に、*Prosopopée du Beaumont levrier du Roy & Charon* と「秋の讃歌」*Hymne de l'Autonne* で「秋」が訪れる「春」の宮殿の描写を取り上げている。この2例ではやはり古代の作品を下敷きにした描写を利用しているが、代名詞 «nous» により、読者の視点が導入されるという、興味深い例となっていることを示した。

参考文献

1. *Œuvres Complètes de Ronsard*, éd. Laumonier, S. T. F. M., Librairie NIZET, 1937-1990.
2. *Catullus/Tibullus/Pervigilium Veneris*, 2nd ed., translated by Francis Warre Cornish/ translated by J. P. Postgate/translated by J. W. Mackail. Harvard University Press/ W. Heinemann,

1988. The Loeb classical library.

3. Creore, A. E., *A word-Index to the poetic works of Ronsard*, 2 vol., W. S. Maney and son LTD., Leeds England, 1972.

4. Homère, *L'Odyssée*, texte établi et traduit par Victor BÉRARD, 3 vol., huitième tirage, Belles Lettres, 1972.

5. Horace, *Odes et épodes*, texte établi et traduit par F. VILLENEUVE, J. HELLEGOUARC'H, Belles Lettres, 1991.

6. Ovide, *Les Métamorphoses*, texte établi et traduit par Georges LAFAYE, sixième trage, 3. vol., Belles Lettres, 1980.

7. Ovide, *L'art d'aimer*, texte établi et traduit par Henri BORNECQUE, septième tirage, Belles Lettres, 1983.

8. Ovide, *Les amours*, texte établi et traduit par Henri BORNECQUE, Belles Lettres, 1930.

9. Ovide, *Fasti*, translated by Sir James George FRAZER, 2nd edition revised by G. P. GOOLD, Harvard University Press, The loeb classical library.

10. Paul Laumonier, *Ronsard poète lyrique*, Slatkine Reprints, 1972, éd. princeps Hachette, 1932.

11. Teofilo Folengo, *Histoire maccaronique de Merlin Coccaie, prototype de Rabelais*, nouv. éd. revue et corr. sur l'éd. de 1606, G. Brunet et P. L. Jacob, Adolphe Delahays Libraire-Éditeur, Paris 1859, reproduction num. BNF, 1995.

12. Virgile, *Énéide (Aeneis)*, texte établi et traduit par Jacques PERRET, troisième tirage, 3 vol., Belles Lettres, 1992.

13. Virgile, *Géorgiques*, texte établi et traduit par Paul MAZON, septième tirage, Belles Lettres, 1982.

14. Virgile, *Bucoliques*, texte établi et traduit par E. de SANT-DENIS, quatrième tirage, Belles Lettres, 1983.

15. ウェルギリウス、『アエネーイス』、泉井久之助訳、岩波文庫、第3刷、1991。

16. ウェルギリウス、『ウェルギリウス　牧歌・農耕詩』、河津千代訳、未来社、初版、1981。

17. オウィディウス、『祭暦』、高橋宏幸訳、叢書アレクサンドリア図書館第一巻、国文社、初版1994。

18. オウィディウス、『変身物語』、中村善也訳、岩波文庫、1984。

19. カトゥルス、ティブルス、プロペルティウス、オウィディウス他、『ローマ恋愛詩人集』、中山恒夫訳、アウロラ叢書、国文社、1985。

20. ホメーロス、『オデュセイアー』、呉茂一訳、岩波文庫、1979。

21. ホラティウス、『歌章』、藤井昇訳、現代思潮社、1973。

22. ロンサール、『ロンサール詩集』、高田勇訳、青土社、1985。

23. 『ペトラルカ　カンツォニエーレ』、池田廉訳　名古屋大学出版会、1992。